

# 新しいクラフトをもとめて 高岡から生まれる力

「工芸都市高岡クラフトコンペティション」が育てるもの



「view」(2009年)高岡クラフトコンペ 生活者が選ぶ消費者賞

25回目を数え、揺るぎない実績と全国的な知名度を誇る「工芸都市高岡クラフトコンペティション」。さまざまな芸術におけるコンペやコンクールがそうであるように、クラフトコンペもまた、新しい才能を見出し、新しい価値を提示する、これ以上はない仕組みである。そして、いつの日も、賞を目標に努力する人たちがいる。

## 学生の発想と職人の技が出会う

箱の中の白い砂が、一斉に落ち始め、面に曲線を描き、形を変えていく。

これは、2011年のクラフトコンペで入選した「面(オモテ)」という作品で、高岡の若い職人たちと、富山大学芸術文化学部の学生たちがコラボレーションしたものだ。大学のサークル活動のひとつで、名前は「クリエイティブ」という。「面」を出品したチームのメンバーで、クリエイティブの副代表である古川優月さんは、「時間を、目に見える形で楽しむ砂時計です。難しかったのは、流れ落ちるすき間の調整ですね」と語る。さらさ



「面(オモテ)」  
クリエイティブ×高岡伝統産業青年会  
素材/アルミ  
表紙の写真は、流れ落ちる様子。

らと流れる砂の、心地いい量と速さ。見ていると、時を忘れてしまうようだ。職人と学生のコラボをスタートさせたのは、高岡伝統産業青年会。銅器・漆器などの伝統工芸に携わる40歳までの青年団体だ。通称は、「伝産」。「伝統産業を継承する若手が主ですが、最近は伝統産業以外の人もメンバーになり、いい刺激になっています。みんな活動的です」と、島谷会長は言う。コラボのきっかけは、高岡短期大学(現・富山大学芸術文化学部)の卒業生だった嶋副会長が、クラフトコンペの出品作品について母校の先生に相談に行ったこと。そこから、学生と共同製作をするという企画が生まれた。学生のアイデアと、職人の知識・技術。新しいものが生まれる予感がした。それが、今から5年前のことだ。



高岡伝統産業青年会  
2011年度会長 島谷 好徳氏

## 取り組み方をステップアップ

1年目は、金属と漆器を分けて企画・製作に取り組んだ。みんなコンペに出品するだけで精一杯だった。「2年目は、しっかり企画して進めようと、学生一人に伝産一人という、1対



「カナメ」(2010年)  
高岡マテリアル賞受賞

1のものづくりをしたんです」と、嶋副会長。3年目には、これまで、デザイン工芸コースだけに参加を呼びかけていたのを、デザイン情報コースや文化マネジメントコースなど、芸術文化学部の全てのコースに広げた。「コンペへの出品は、つくるだけでなく、つくったあとのマネジメントもあります。展示会の展示方法やDMのデザインも全て任せました」クラフトコンペを利用して、デザインやものづくりに関わるあらゆる作業を経験しようと考えたのだ。この年、初めて出品作が入賞した。フォトスタンド「view」が、「生活者が選ぶ消費者賞」を受賞したのである。



高岡伝統産業青年会  
2011年度副会長 嶋 光太郎氏

そして、2010年、学生たちは、サークルとしての「クリエイティブ」を立ち上げた。クリエイティブとして初めての出品で、キャンドルホルダー「カナメ」が、高岡マテリアル賞を受賞した。素材を活かした新しい表現を見出したことが評価されたのである。

## クリエイティブで学び、羽ばたく

2011年は、キーワード選びから始め、学生と伝産のメンバーが5つのチームに分かれて、作品の企画・製作を進めていった。夏には、金属や漆器の工場を見学した。「まず、高岡の技術を知ること。それを自分たちの作品につなげてほしい」と、嶋副会長。

丁寧に説明する伝産のメンバーと、真剣に聞き入る学生。芸術文化学部は、県外からの学生も多い。クリエイティブの代表の宮地寛之さんは、奈良県出身だ。「クリエイティブで、高岡の伝統工芸を、身近に感じるようになりました。作品について、伝産の人たちの意見は厳し

いですが、そこから新しい方法を見つけていくんです」

彼は、商品として売れるものづくりをめざしたいと語る。将来は、起業も考えているという。

クリエイティブを卒業した学生たちは、それぞれの夢や目標に向かって羽ばたいていく。島谷会長は、「彼らは、高岡の力を知っています。卒業してからも、高岡にできることを相談してくれればと思っています」と話す。

離れていても、同じものづくりに参加できる。むしろ、高岡を起点にネットワークが広がっていく。

2010年のクリエイティブ代表だった武田怜さんは、富山市出身で、現在は東京都在住。デザイン会社でアシスタント・デザイナーを勤めている。

「高岡は、非常に思い入れのあるまちです。入社してから、会社が高岡のメーカーさんと昔から付き合いがあることを知ったり、ものづくりで高岡の職人さんが関わっていることを知ったり、やはり縁を感じます」と、話す。「これからも高岡と関わることはありますし、

いつか自分でも、一緒にものづくりができればと思っています」。

武田さんだけでなく、ものづくりの道を歩めば、きっとまた高岡と出会う。高岡で育った若い力との新しい交流が始まっている。

## コンペへの熱い思いが広がる

1986年、高岡クラフトコンペの開始にあたって、多くの人々が尽力したが、最初に動いたのは、伝産だった。

その頃、「クラフト」という言葉がまだ新しく、高岡の伝統産業を何とかしなくては、と思っていた当時のメンバーがクラフトコンペの開催を働きかけた。やがて、それに賛同する人々とともに、大きな力となるのである。

なぜ、多くの人々が全国公募のコンペ開催へ動いたのだろうか。「高岡に新しいものづくりの風を起こしたい」「伝統工芸を活かしたい」。いろいろな思いがアクションを起こさせるが、その発端は、いつも若い力である。さらに、クラフトコンペは、長い歴史

のなかで、何度か方向性の確認や改革が行われており、2010年から、新しい審査基準と賞が設定されている。

その実行委員会の会議に、伝産のメンバーも活発に参加している。コンペの目標や審査方法など、自分たちの意見を言い、議論を交わす。コンペの賞を決めることは、コンペの目的を明確にすることである。現在、高岡クラフトコンペでは、グランプリに「ファクトリークラフト」と「コンテンツポラリークラフト」の2つの賞を設定している。

そして、今回の高岡クラフトコンペに出品された作品1734点に、それぞれの誕生ストーリーがあり、入賞や入選の喜びがある。あるいは落選の反省が、人々を前へ進ませていく。

クラフトコンペは展示会だけの事業ではない。さまざまな場面でヒト・モノ・コトが関わり合い、高岡を起点とした新しい力となって育とうとしている。コンペの審査が終わった1ヶ月後、クリエイティブのメンバーたちは、今回の出品の反省を踏まえ、来年に向けての活動をすでに始めている。

「工芸都市高岡クラフトコンペティション」ホームページ <http://www.ccis-toyama.or.jp/takaoka/craft/>  
「高岡伝統産業青年会」ホームページ <http://www.takaoka-densan.com/>



①銅器工場見学(高田製作所)②漆器工場見学(三佳)③アイデアを話し合うクリエイティブメンバー④試作品制作で漆を塗る(京田仏壇店)⑤鋳込み(北辰工業所)⑥学内での最終プレゼンテーション(中央が古川さん)⑦審査会場に並べられた作品⑧11月9・10日に行われた審査会。グランプリの「和く和くぎ」を見る小泉誠さん。



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

## 第1回「高岡クラフトツーリズム」

クラフト展期間中の2012年1月14日、真冬の高岡に青空が広がった。伝産の新しい事業「クラフトツーリズム」の初日、JR高岡駅瑞龍寺口に参加者20名が集合。北海道や佐賀県からの参加者もいた。

「クラフトツーリズム」とは、「クラフト」と「観光」を合わせた伝産の造語である。2010年、伝産の委員会のひとつ、「コトづくり委員会」が企画した。

「ものばかりではなく、コトをつくって高岡に人を呼びたいというのが趣旨です」と、島谷会長。

毎年、たくさん応募があるクラフトコンペ。しかし、実際に高岡を訪れるのは、表彰式に出席する入賞者だけというのが現状だ。この応募者に誘いかけて、高岡銅器の工場見学や体験を盛り込んだツアーで、より深く高岡の魅力を知らせてもらおうと考えたのである。「クラフトに興味がある人たちなら、きっと高岡を好きになる。高岡を知ってもらい、さらにその友人などに広がってほしい」と思ったんです」と、嶋副会長は言う。

入選者全員に、募集の案内を送った。ツーリズムを担当する笹島委員長は、「限られた時間でどこを見ていただくか、プランづくりが大変でした」と話す。参加者は、バスに乗り込み、最初の工房「モメンタムファクトリー・Orii」へ。Oriiでは、伝統の着色技法について、折井宏司さんより説明を受けた。

着色を上演して見せる折井さんの手元を、のぞき込む参加者たち。「同じ模様は、ふたつとありません」と折井さん。続いて、銅器・アルミ・鋳造メーカーである「株式会社道具」へ。工場では、鋳型に砂を込める作業が行われており、道具志朗さんより、砂の違いなどについて説明を受け、各工程を見てもらった。

やがて、鋳込みが始まると、参加者は、身を乗り出すようにして見ていた。その後は、クラフト展の会場へ向かい、講評会・表彰式に参加。夜には、交流会で楽しい時間を過ごした。

## 出会いと交流が次の実りへ

翌15日は、高岡地域地場産業センターでのづくり体験を実施。錫のぐい呑みづくりを楽しんだ。

参加者には、グランプリの成瀬好徳さん、浅野太郎さんはじめ入賞者もいた。

「同じ金属でも、素材が違うと技術や工程などが違うので、異業種の方も興味をもたれたのでは」と、笹島委員長。

参加者からは、「自分も金属を扱っているのでも、とても興味深く見ました」「深い部分を見せてもらった。時間内だけでは足りなかった」などの感想が聞かれた。普段見られないところを見学できたことに評価が高かった。

「また来たい」と言ってくくださった方もあります。時間の短さや人数など、今回の結果を踏まえて、もっと充実させていきたいですね」と、委員長。

ことが大切だと話す。

## コンペは、メディアのひとつ

今年もクラフトコンペの審査員を務めた小泉誠さんは、「高岡は、ものをつくっていくまち。その地域資源をどう活用するか。クラフトコンペは、そのメディアのひとつ」と、語る。

「コンペそのものは、『点』。それをどうつなげていくか。強い点じゃないと、弱い線にしかならない」と、強さを持つ

今回も、クラフトコンペという媒体を通して、いくつもの経験と発見が生まれている。冒頭で紹介したクリエイティブの古川さんは、「自分でつくるだけでなく、ものづくりのマネジメントをしてみたいと思いました」といい、大学でも学びたいと語る。コンペ出品や受賞が、人々にもたらす多彩な実りは、直接には見えないが、これらは、コンペがあればこそその成果である。

クラフトコンペは、ものづくり人間たちを育てる豊かな「土」であり、「水」であり、「太陽」なのではないだろうか。そして、改革を重ねながら育て続けていることが、「高岡」というまちの底力、ものづくり力なのである。「クラフトのまち高岡」は、若い力と新たな可能性を生み出していく、かけがえのない資産を持っているのである。

## 審査することと、それを伝えること

2011クラフトコンペ審査員  
デザイナー 小泉 誠さん

2010年は、新しい賞について審査員と議論し、その内容を図録にも掲載しました。成果だけでなく、そこに至る経過と、皆さんの発言をきちんと伝えることが大事だと考えています。言葉にも気をつけていますし、伝わる方法を模索しています。風通しのいいコンペでありたいですね。今回も、図録で審査経過を掲載しています。

高岡のものづくりについては、世代交替をいかにしていくかでしょうね。コンペについても、関わっているメンバーが若手であることは、次を生み出すための力になると思います。



審査会風景(写真右が小泉さん)



青木 有理子さん Yuriko Aoki  
富山県生まれ。秋田公立美術工芸短大専攻科修了。  
高岡クラフトコンペ2004生活者が選ぶクラフト賞を受賞。



「sepia」(器)  
素材/銅・銀・漆

## 出会いやチャンスが広がります

高岡クラフトコンペは、秋田の短大時代から知っていました。その頃は、「使って楽しいもの」を考えていて、動物の形をした容器のアイデアが浮かんだんです。それで、ハリネズミの入れ物をつくって、修了の年に出品したんですよ。その作品が受賞し、(株)能作で商品化していただきました。

高岡クラフトコンペは、私にとって特別なコンペ。賞だけでなく、いろいろな出会いやチャンスもコンペがもたらしてくれるんです。今後も出品し続けたいと思っています。



「匹で数える器」  
2004年 生活者が選ぶクラフト賞

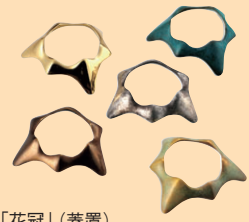
## interview

クラフトコンペで活躍する若い力

## ものづくりについて考える機会

2010年の出品作「花冠」は、茶道をしている母から、「お茶道具をつくってほしい」と言われてつくったものです。要望に応えてつくるのは、つくりがいがありました。茶道具の制作では、実用品にはいろいろな制約があること、それを活かすようにつくりたいとけいことを学びました。ふだんはオブジェ等を制作しているのですが、用途を意識せず、美しいものを作ることに集中しています。

クラフトコンペに挑戦したことで、日本人にあまり馴染みのない金属をどうアピールできるか可能性を探る機会になりました。答えはなかなか出ませんが、それを求めチャレンジすることも、高岡でもものづくりに取り組む一つの喜びです。



「花冠」(蓋置)  
素材/真鍮



尾崎 迅さん Hayate Ozaki  
大阪府生まれ。金沢美術工芸大学鋳物専攻卒業。  
高岡クラフトコンペ2010に初めて出品した「花冠」が入選。



(右) 着色の折井さんの説明に聞き入る参加者の皆さん



(左) 工場内の説明をする道具さん(下) 鋳込みの工程を見つめる皆さん



(上) クラフト展会場において、審査員による講評会が行われた(右) 入選作について自由に講評を求める場面で、審査員に説明するクリエイティブの古川さん



(上) 集合場所のJR高岡駅瑞龍寺口(左) 参加者はバスで移動。車内では伝産メンバーが高岡の歴史や名所などを紹介した

